日本の原発安全神話の成立の真相　後藤貞雄　2012 年 12 月 1 日

まえがき

安全神話とは原発を推進する行政・事業者・技術者が信じていた次である。

① 日本の技術、技術者、電源は世界一優秀で信頼性が高い

② よって日本の原発は安全であり、深刻な事故は起こらない

「安全神話」は、2011 年 3 月の福島原発事故の最も重要なキーワードである。安全神話を背景にして、長期間の全電源喪失は想定不要と原発安全設計審査指針に規定し、軽視した津波により、全電源喪失が現実に起こり原子炉 3 基がメルトダウンしたのである。

絶対的な安全の思い込みにより成立した安全神話は、論理的・技術的思考というより、文化や宗教、主義に近いものである。その構造は、バブル、オウム、軍国主義などに似ており、原子力以外の技術分野では見られない。世界のどこにもない日本特有のものであるという。

そこで、なぜ日本だけに安全神話が成立したかの真相を探ってみよう。

１．　安全神話成立の主なる背景

その背景は次の事項が考えられる

① 原発の利便性の高さ（夢のエネルギー）、資源問題、国策推進

② 原発・核の危険性のため立地折衝が厳しい

③ 狭い国土、高い人口密度、地震国などのため立地折衝が厳しい

④ 唯一の原爆被爆国、日本文化の精神性（神の国、言霊など）

⑤ 技術立国、ヒューマンファクター（人間の特質）、平和ボケ

２．　原発の利便性の高さと資源問題・国策推進

1950 年代、核エネルギーは夢のエネルギーとして、全世界的にその平和利用の機運が高まり、原発の技術開発と建設に拍車がかかり、原発はどこでも歓迎された。特に、資源が乏しく、太平洋戦争が資源問題をきっかけとして開戦された経験がある日本では、国策として 1950 年代中ごろから積極的に推進された。その始まりは、中曽根康弘氏と初代原子力委委員長正力松太郎氏であることはよく知られている。

すなわち日本では、国策としての原発の推進が義務付けられた。

３．　原発・核の危険性のために立地折衝が厳しい

原発、核の危険性は、他の工学、技術にはない特異なものである。放射線は目に見えず匂いもなく人命に極度に危険である。それは人の遺伝子に数世代にわたり影響し、万一の放射線汚染は長期間・広範囲にわたる。そのような原発の立地に当たっては、住民説明・説得のためには可能な限り安全性を強調せざるを得なかった。

４．　狭い国土、高い人口密度、地震国などのため立地折衝が厳しい

日本は国土が狭く人口が多い。そのため原発は比較的民家、住民の居住地に近いところに立地せざるを得ない。そこで立地折衝に当たっては、その危険性をなるべく隠す必要があったと考えられる。

さらに世界一の地震国であることも、安全性を強調する理由となったのであろう。

５．　唯一の原爆被爆国、日本文化の精神性（神の国、言霊など）

世界で唯一の原爆被爆国である日本人は核アレルギーが強く反対も強烈で、立地折衝は困難を窮めた。そこではまた安全性を最大限に強調する必要があった。

さらに古来、日本文化は精神的なものが中心にあり、論理的思考にはなじまなかった。神国不敗の思い込み、神頼み、神社参拝、お祓い、建設現場などの神棚などがその例である。また言葉が現実に結びつく「言霊」などの例もある、

そのような背景から、反対者との折衝も、論理的な議論というより感情的、賛成反対の平行線となり、絶対安全を唱えるしかなかったのであろう。

６．　技術立国、ヒューマンファクター（人間の特質）、平和ボケ

高等教育を受け論理的な思考になれた技術者や推進者が、何故原発の絶対安全、安全神話を信じたのであろうか。日常では誰もが生命保険、火災保険を掛けているではないか。

まず日本の平和ボケである。平和憲法と 60 年代の安保闘争以後、日本全体が平和に慣れ危機の意識が希薄になり、平和ボケの状態を続けた。それが原発の危険性に対して過度の楽観的空気を生みだし安全神話に結びついた。

その間、経済に集中し、戦後の焼け野原から経済的繁栄を勝ち取った、日本人には、技術による成功体験、技術への過信があったのだろう。

また人の特性、ヒューマンファクターを考えずには理解できない。人はあることに集中すると時に思い込みをしやすい。催眠術が示すように暗示にもかかりやすい。人の思い込み、被暗示性は非常に強力である。一度信じるとそこから容易には抜け出られない。

平和になれ、自らの技術を過信した日本では、立地の説明の方便であった安全神話が、世代交代の内にいつの間にか現実に思え、説明者自身が落ち込んで行ったのである。

歴史的にも、近年の世界金融危機、日本のバブル崩壊、軍国主義さらにはオウム事件など、同じ構図は枚挙にいとまがない。

７．　日本の安全神話成立の真相

以上述べた背景のうち、原発の利便性、危険性、無資源国、国策、狭い国土、高い人口密度、地震国、ヒューマンファクターなどについては、韓国などの外国でも同じである。

日本だけに成立した安全神話の背景は、日本のだけの特性、唯一の原爆の被爆国、情緒中心の絶対安全文化、日本語の精神性、平和ボケ、技術過信があげられるだろう。

参考１

安全神話はなぜ日本にだけ成立したか

太平洋戦争と経済封鎖ABCD 無資源国　被爆国	原発便益性 夢のｴﾈﾙｷﾞｰ	国土横溢･人口稠密　危険性	日本語 言霊
1955年代 国策推進 物理学者推進			
日本型原発(低人口地帯、避難などを規定せず)			
1965年代 具体化 立地説得のため絶対安全を説明(危険性意識)			
高度成長経済大国、技術立国成功　原発人気の沸騰			
技術過信、日本電源安定(米国大停電)、原発反対			
平和ボケ(戦後、憲法9条、安保以後、四辺海、単一民族)			
1971年　初の原発稼働(福島第一原発1号機)			
1977年　全電源喪失想定不要規定：安全神話の萌芽			
1979年　ｽﾘｰﾏｲﾙ島原発事故⇒同上30分喪失規定、世代交代			
1993年　規定見直し事業者反対：安全神話･思考停止･津波軽視			
2011年　福島第1原発全電源喪失炉心溶融(ﾘｽｸﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ、危機管理失敗)			
他国にない原因？　⇒被爆国、技術立国過信、平和ボケ、日本語			

15